

錦織監督

映画の現場から

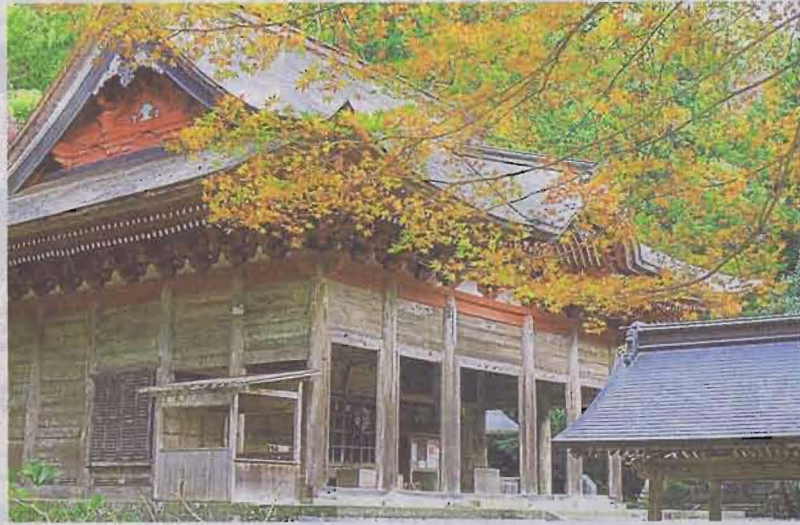


●●17

光を観(み)る、と書いて「観光」。見たこともない景色やモノに触れることが旅の醍醐味(だいごみ)とすれば、その土地その土地の光を観る、という感覚は何となく理解できる。

旅に出れば海外はもちろんのこと、国内においても自分の生まれたところにはない景色や文化を観てみたいもの。日本中どこもかしこも同じような風景が増え、代わり映えのない駅前が広がる。若いも若きも普段の食事は全国チェーンのレストランに集う。しかし、旅先となると様子が違ってくる。その土地の名産を食したいという願望が募り、ガイドブック片手に探し歩く。

旅慣れてくると違う景色やモノを観るのはもちろん、歴史やそこに生活している人



昔からの風情を残す出雲の名所 鰯洲寺

景色や生活感じられる旅を

たちの息吹を感じたいと思うようになる。そうすると日本の旅は厄介だ。いろいろなものが旅情を邪魔してくる。目的地までは近代建築のビルやアスファルトに覆われ、看板がないと写真を撮ってもどこの町かわからない風景が続き、突然ある地点から「いわゆる観光地」になる。そうならないところもあるが、全国多くの観光地が遺跡や旧跡そのものを「見る」ことが目的になっている。

そのプロセスが大切で、そこに住む人たちの佇(たたず)まいや歴史や伝承からくる独特の生活感が感じられる街並みや看板を期待していくのがかりする。多くの観光地にはプラスチック製のポールに旗がひらめき、多くの看板が景色の邪魔をする。映画の舞台になるようなところが真の観光地と言った人がいたが、日本の「いわゆる観光地」は映画の舞台にはなりにくい。ヨーロッパなど毎年多くの観光客が訪れる海外の名勝地にはこのような看板や旗がほとんどない。景色や風情を楽しんでもらうことを真のもてなしだともいうように。

良い景色だと思うのは人それぞれであり、ここが観光地ですよ、良い景色ですよ、と押し付けたりしない。観る人に任せる。何度来ても発見があるかもしれないから。人によっては看板が掲げられている場所以外の風景に感動するかもしれないし、看板がなければ誰かと触れ合うこともあるかもしれない。探して見つけることでその土地の人と会話が生まれ、情に触れてこそ真の観光地と思う。山陰はその環境にあふれている…。

必要な看板もある。しかし余りの観光看板の多さに、まるで聞かれることを嫌がっているようにさえ感じてしまう。看板がないと記念写真を撮ったりするのに困るし、どこが観光地かわからないという苦情が来るという。難しい問題だ。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載